

## 2026年4月 豚遺伝的能力評価結果の概要

家畜改良センター  
改良部情報分析課

2026年（令和8年）3月末までに、一般社団法人日本養豚協会を通じて収集された繁殖形質（生産頭数、3週時育成頭数及び3週時一腹総体重）、産肉形質（DG、BF及びEM）の測定記録及び血縁情報を利用して、豚遺伝的能力評価を実施しました。

なお、評価結果は信頼度が公表基準を満たした個体の育種価のみを提供しています。

## 1. 評価に採用した記録数等

評価に採用した記録数等は次のとおりです。

「記録数」は延べの記録数、「個体数」は血縁個体の数、「記録をもつ個体数」は分娩した母猪の数を示しています。

表1. 評価に採用した記録数及び個体数

繁殖形質				産肉形質			
記録数 個体数	生産頭数	3週時 育成頭数	3週時 一腹総体重	記録数 個体数	DG	BF	EM
バークシャー種				バークシャー種			
記録数	83,355	41,166	31,370	記録数	3,391	3,353	3,353
個体数	26,240	26,240	26,240	個体数	6,051	6,051	6,051
記録を持つ個体数	21,565	13,926	11,324				
ランドレース種				ランドレース種			
記録数	184,871	34,173	22,781	記録数	5,758	4,967	4,951
個体数	74,301	74,301	74,301	個体数	10,822	10,822	10,822
記録を持つ個体数	57,847	21,596	15,606				
大ヨークシャー種				大ヨークシャー種			
記録数	112,409	26,889	20,363	記録数	5,022	4,369	4,325
個体数	48,118	48,118	48,118	個体数	8,947	8,947	8,947
記録を持つ個体数	36,504	16,134	12,557				
デュロック種				デュロック種			
記録数	81,079	26,297	18,381	記録数	19,807	17,144	17,057
個体数	40,688	40,688	40,688	個体数	27,052	27,052	27,052
記録を持つ個体数	27,607	14,428	10,990				
全品種計				全品種計			
記録数	461,714	128,525	92,895	記録数	33,978	29,833	29,686
個体数	189,347	189,347	189,347	個体数	52,872	52,872	52,872
記録を持つ個体数	143,523	66,084	50,477				

DG：1日平均増体重（g）、BF：背脂肪の厚さ（cm）、  
EM：ロース断面積（cm<sup>2</sup>）

## 2. 各効果の水準数

評価に用いた BLUP 法アニマルモデルに含まれる各効果の水準数は次のとおりです。

表 2. 各効果の水準数

繁殖形質				産肉形質			
効果	生産頭数	3週時 育成頭数	3週時 一腹総体重	効果	D G	B F	E M
バークシャー種				バークシャー種			
農家 (生産者)	357	357	-	農家 (生産者)	58	58	58
地域・季節	18	18	18	地域・季節	18	18	18
分娩年	33	33	-	生年	35	35	35
農家・分娩年	-	-	812				
ランドレース種				ランドレース種			
農家 (生産者)	850	850	-	農家 (生産者)	107	107	107
地域・季節	18	18	18	地域・季節	18	18	18
分娩年	33	33	-	生年	34	34	34
農家・分娩年	-	-	1,698				
大ヨークシャー種				大ヨークシャー種			
農家 (生産者)	577	577	-	農家 (生産者)	103	103	103
地域・季節	18	18	18	地域・季節	18	18	18
分娩年	33	33	-	生年	33	33	33
農家・分娩年	-	-	1,223				
デュロック種				デュロック種			
農家 (生産者)	557	557	-	農家 (生産者)	156	156	156
地域・季節	18	18	18	地域・季節	18	18	18
分娩年	33	33	-	生年	34	34	34
農家・分娩年	-	-	1,409				

※データの採用条件及び評価モデルについては、当センターホームページの以下の場所に掲載している。

<https://www.nlbc.go.jp/kachikukairyo/iden/buta/hyokaho.html>

### 3. 前回評価値との相関

前回（2026年1月）と今回の評価で共通して評価対象となっている個体について、前回と今回の評価値間の相関係数を計算しました。

繁殖形質及び産肉形質ともに全体的に高い相関が得られました。

表3. 前回評価値との相関係数

繁殖形質		産肉形質	
形質	相関係数	形質	相関係数
バークシャー種		バークシャー種	
生産頭数	0.999	D G	1.000
3週育成頭数	0.997	B F	1.000
3週時一腹総体重	0.997	E M	1.000
ランドレース種		ランドレース種	
生産頭数	0.999	D G	1.000
3週育成頭数	0.988	B F	1.000
3週時一腹総体重	0.990	E M	1.000
大ヨークシャー種		大ヨークシャー種	
生産頭数	0.999	D G	1.000
3週育成頭数	0.993	B F	1.000
3週時一腹総体重	0.995	E M	1.000
デュロック種		デュロック種	
生産頭数	0.999	D G	1.000
3週育成頭数	0.998	B F	1.000
3週時一腹総体重	0.996	E M	1.000

#### 4. 生産頭数の生年別平均育種価の推移

生産頭数における生年別の評価頭数と平均育種価を表4に、生年別平均育種価の推移（雌）を図1に示しました。なお、遺伝ベース（育種価の平均をゼロとする基準）は、1996年に産まれた個体の育種価の平均としました。

2009年以降、ランドレース種、大ヨークシャー種およびデュロック種において、品種差はあるものの平均育種価は年々向上しています。最も向上がみられているランドレース種の2022年生まれの平均育種価は1.40となっています。

表4. 生年別の評価頭数と平均育種価

##### 生産頭数

生年	パークシャー種		ランドレース種		大ヨークシャー種		デュロック種	
	頭数	育種価	頭数	育種価	頭数	育種価	頭数	育種価
1996	340	0.00	3,350	0.00	1,796	0.00	1,113	0.00
1997	410	-0.03	3,299	0.00	1,669	0.02	935	0.02
1998	450	0.05	2,879	0.01	1,812	0.05	1,046	0.03
1999	682	-0.02	2,651	0.02	1,791	0.05	984	0.03
2000	898	-0.05	3,172	-0.04	1,948	0.03	1,124	0.08
2001	623	-0.04	3,017	-0.03	1,669	0.05	1,102	0.04
2002	645	0.03	2,449	0.01	1,495	0.09	1,024	0.06
2003	873	0.00	2,034	0.03	1,281	0.09	1,011	0.08
2004	835	0.01	1,689	0.04	915	0.07	1,040	0.06
2005	822	0.00	1,376	0.07	969	-0.01	986	0.11
2006	783	0.04	1,234	0.13	1,025	-0.06	795	0.11
2007	942	0.02	1,165	0.19	1,138	0.02	808	0.17
2008	968	0.03	1,131	0.29	797	0.05	806	0.13
2009	864	-0.02	963	0.20	789	0.01	626	0.00
2010	707	0.07	1040	0.27	769	0.04	657	-0.01
2011	685	0.16	1051	0.30	923	0.06	677	-0.02
2012	765	0.16	1062	0.50	1108	0.14	757	0.01
2013	630	0.26	970	0.90	839	0.36	647	0.00
2014	627	0.29	1134	0.99	924	0.36	640	0.02
2015	736	0.34	1049	0.84	831	0.34	610	0.01
2016	686	0.27	1010	0.94	767	0.35	681	-0.08
2017	684	0.19	981	0.90	602	0.38	658	0.00
2018	714	0.28	1262	1.08	596	0.32	733	0.09
2019	798	0.31	1354	1.04	821	0.35	628	0.06
2020	673	0.37	1125	1.13	793	0.61	681	0.19
2021	678	0.34	1113	1.24	643	0.66	562	0.18
2022	672	0.35	1115	1.40	669	0.62	564	0.18

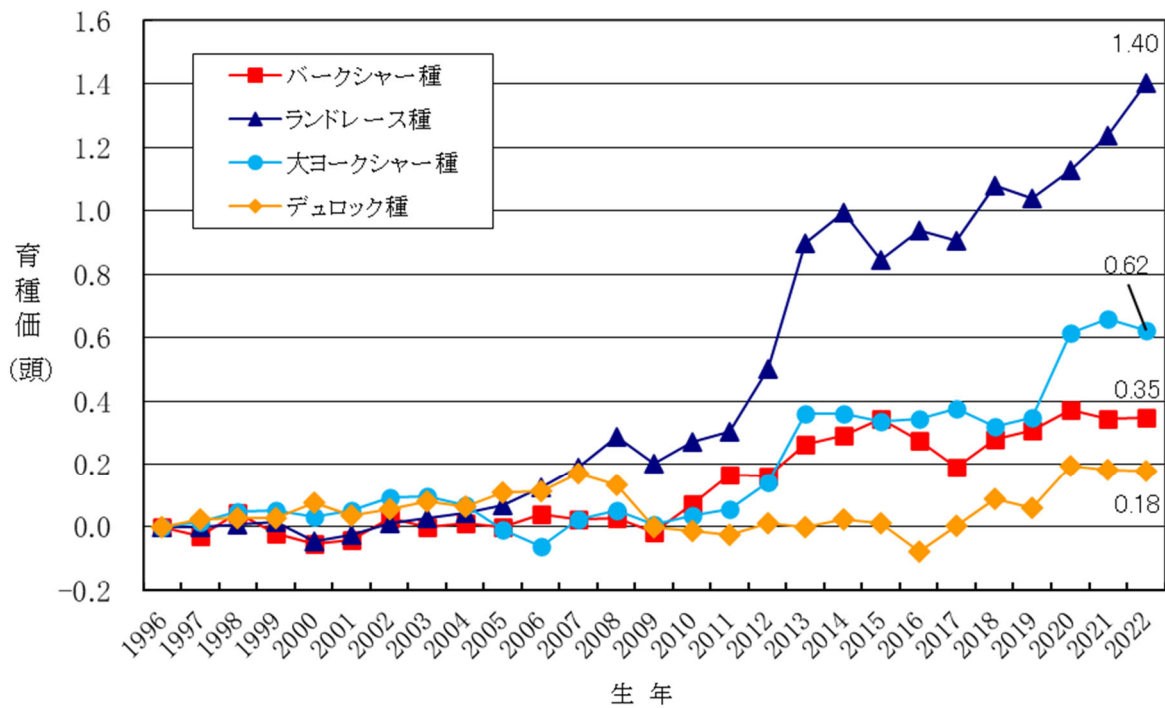


図 1. 生産頭数の生年別平均育種価の推移 (雌)

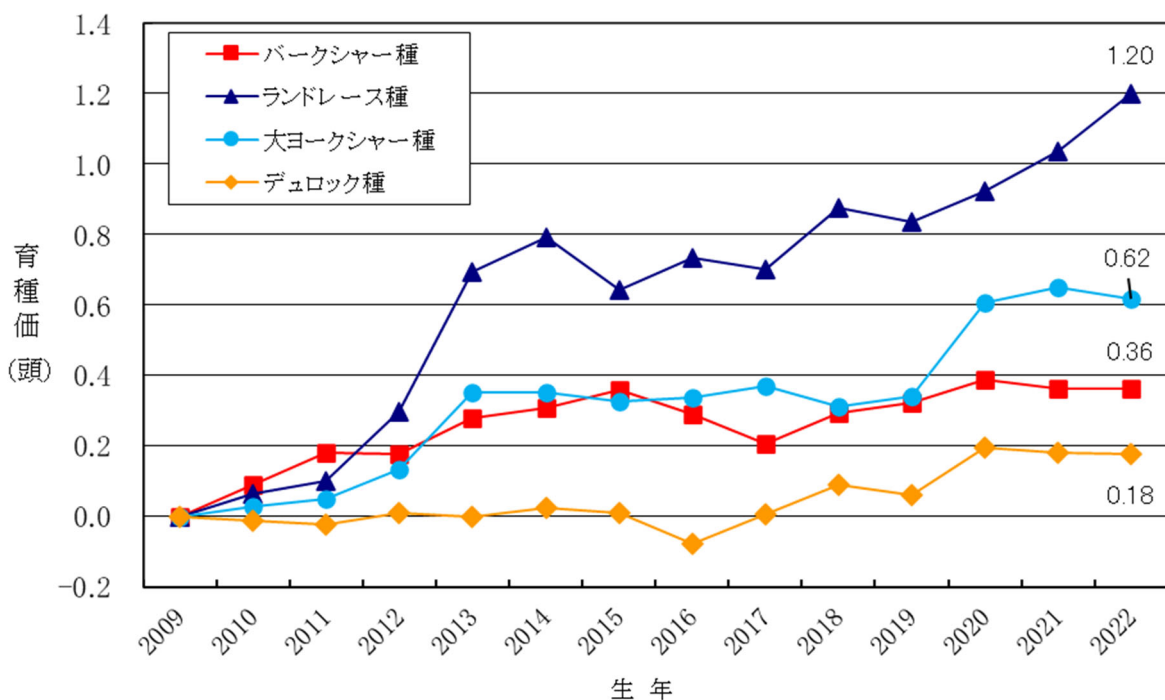


図 2. 生産頭数の生年別平均育種価の推移 (雌 : 2009~2022 年)

注) 参考までに、遺伝ベースを 2009 年として直近 13 年の推移を図 2 に示しました。(育種価の推移は、年毎のデータ数を加味し、2022 年までとしています。) なお、直近の年の平均育種価については、今後頭数が増えることにより数値が変動する可能性があります。

## 5. 季節の効果の情報提供

繁殖形質（生産頭数・3週時育成頭数・3週時一腹総体重）における季節の効果について図3から図5に示しました。

各形質の値については、実際の値に近似させるため、以下の計算方法で算出した値を表示しています。

表型平均+（各季節の効果-季節の効果の平均値）

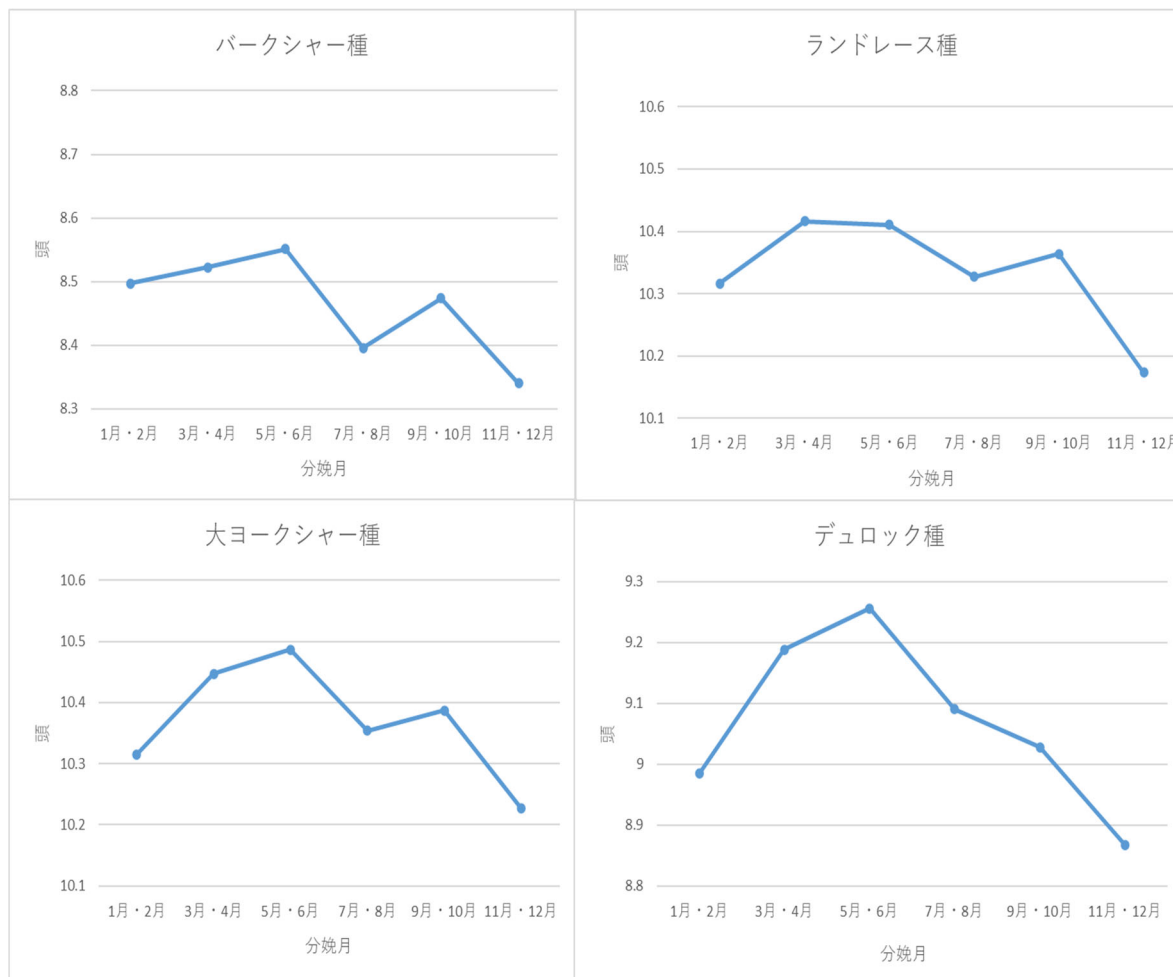


図3 生産頭数に対する季節の効果

- 全ての品種で冬にかけて低くなる傾向があり、特にデュロック種は、季節による効果の差が他の3品種に比べて大きくなっています。
- 7月・8月は真夏の分娩となるため、一時低下する傾向にあります。
- 11月・12月にかけて低くなるのは、交配時の種豚への暑熱の影響が分娩時に現れると考えられるため、通気性を良くする等の暑熱対策を行うことで、生産頭数の改善が期待されます。

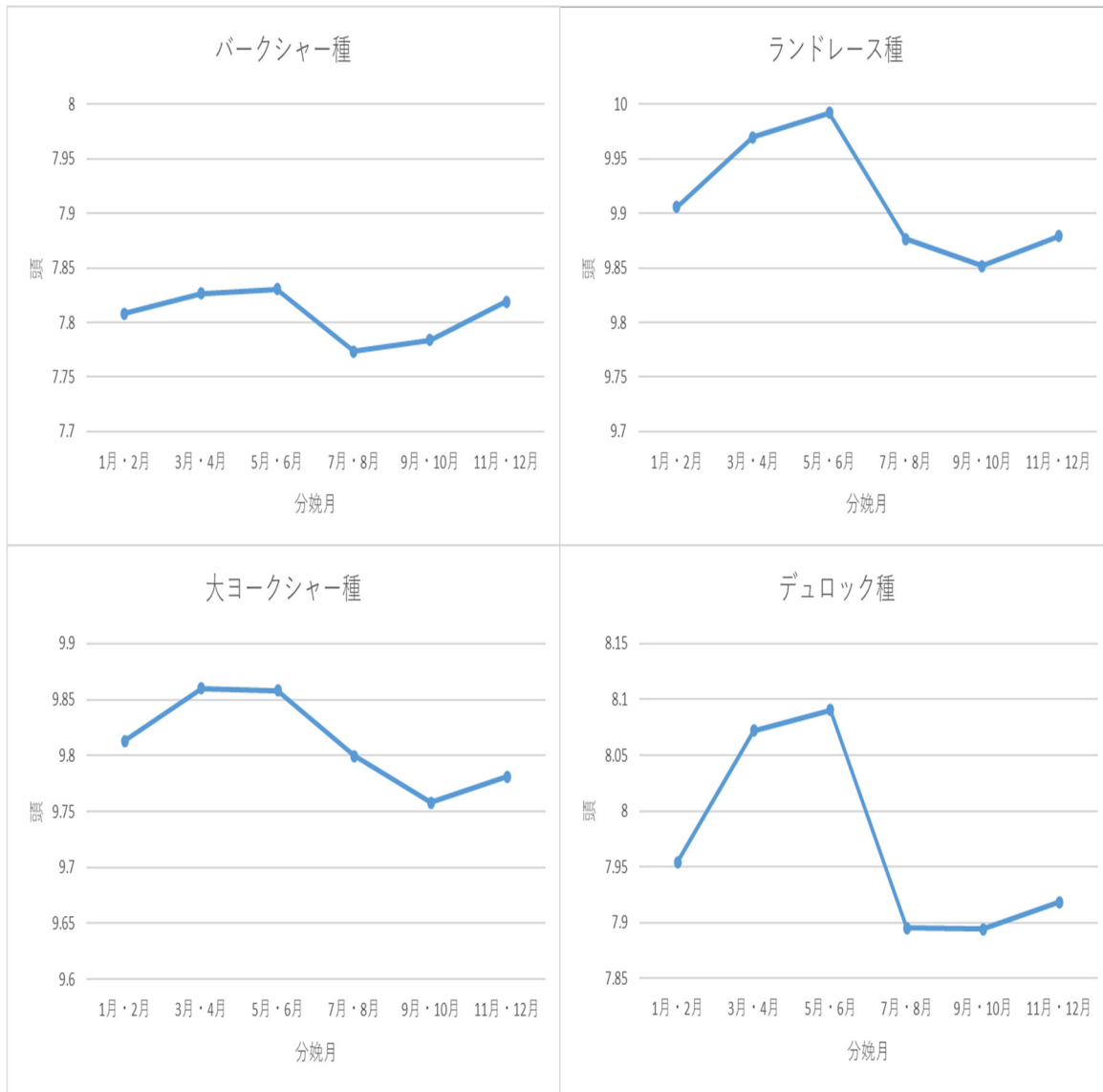


図4. 3週時育成頭数に対する季節の効果

- 全ての品種で3月から6月にかけて高めの傾向にあります。
- デュロック種においては、季節による効果の差が他の3品種に比べて大きく、5月・6月で高くなり、7月から10月にかけて低くなっています。
- その他の品種においても、7月から10月にかけて低くなる傾向があることから、母豚の暑熱対策により3週時育成頭数の改善が期待されます。
- 冬も低めの傾向があることから、哺育時の子豚には安定した保温対策を行うことで3週時育成頭数の改善が期待されます。

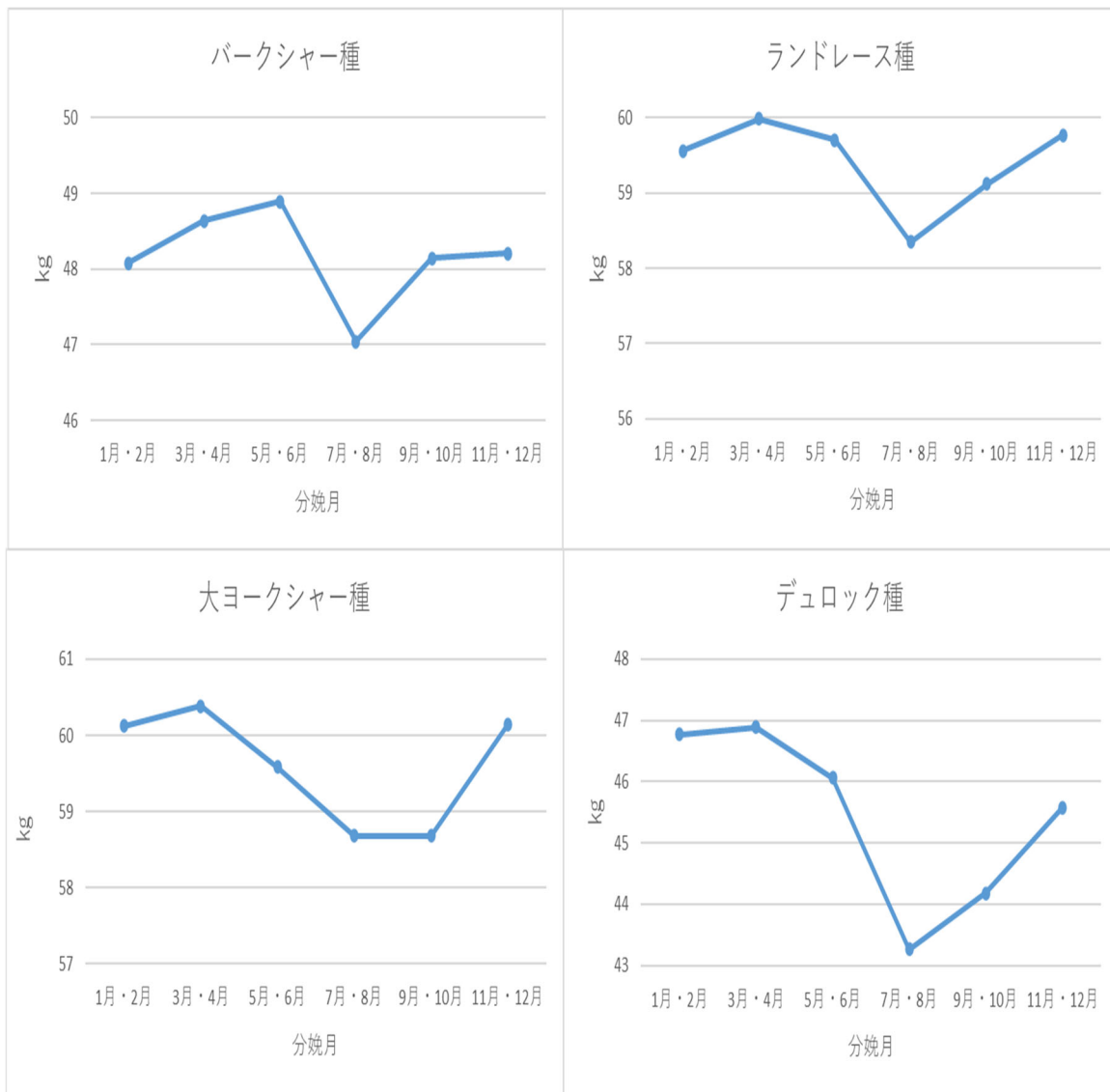


図5. 3週時一腹総体重に対する季節の効果

- デュロック種においては、他の3品種に比べて季節による変動幅が大きくなっています。
- 全ての品種で7月・8月に低くなる傾向にあり、暑熱の影響が大きいと考えられることから、母豚の暑熱対策により3週時一腹総体重の改善が期待されます。

## 6. 農家に提供される情報

各品種及び形質別の評価方法の違いを表5にまとめました。

表5. 各品種及び形質別の評価方法の違い

形質	バークシャー種	ランドレース種	大ヨークシャー種	デュロック種
繁殖形質	全国評価※1	広域評価※2		
		地域内評価（県内）※3		
		農場内評価※4（全国評価、広域評価及び地域内評価に属さない農場）		
産肉形質	農場内評価※4			

### ※1 全国評価

：全国どの個体同士でも育種価が比較可能です。バークシャー種で実施中です。

### ※2 広域評価

：広域評価に属する農場（遺伝的な血縁関係が強く繋がっている農場）間であれば、どの農場の個体同士でも育種価が比較可能です。他地域の個体とは比較できません。

### ※3 地域内評価（県内評価）

：該当する県内であれば、どの農場の個体同士でも育種価が比較可能です。他地域の個体とは比較できません。

### ※4 農場内評価

：農場内の個体同士であれば、育種価が比較可能です。他農場の個体とは比較できません。